

滯佛中の黒田清輝

上

隈元謙次郎

一

明治十七年（西紀一八八四年）黒田清輝は多年の冀望に従ひ、法律研究の爲め佛蘭西巴里に遊學することとなつた。即ち、此の年二月一日その義兄橋口直右衛門が佛蘭西公使館書記生として赴任するに際し、同行することとなり、此の日東京を出發した。翌二日横濱にてボルガ號に乗船出帆した。二月八日香港著、同地に四日を過し、十一日船を更へオクシユス號に乗船同港を出帆した。十八日サイゴン到着、次で十八日シンガポールに至つた。斯くて印度洋を渡り二十四日にはコロンボに著き、月を越えて三月三日アデンに至り、次でイスマリア、ポルトサイドを経て三月十三日ナポリに至り、同じく十五日マルセイユに到着した。斯くして、同月十八日夜巴里に入つた。（註一）

茲に於て、三月二十二日には、橋口直右衛門及び公使館書記生宇川盛三郎の斡旋により、語學修練のため先づ巴里のバティニョール街に在つたアンステイチューション・ゴツフアール Institution de M. Goffart, Boulevard des Batignolles に入塾した。これは、ゴツフアールを校長

とする私立小學校であつて、幹事にデュアルトなる人と副幹事にカミナなる婦人があり、其他教師七八人、生徒凡そ百五十人位であつた。これ等の生徒は、此處に於て教授を受くる者と、リセーに通學する者で、此處に起居する者もあつた。黒田は勿論此の小學校に起居して校則に従つて生活し、ゴツフアール、カミナ等より教育を受け、語學其の他の學科のみならず、佛蘭西の習慣等をも見聞した。（註二）其の後間もなくアンステイチューション・ゴツフアールには、後の陸軍中將久松定謨（註三）が入塾し來り、黒田は日曜等には彼と行動を共にし、又橋口直右衛門や松波正信或は松方正作の諸氏と交つた。

而して、彼が西洋畫術を研究し、これを以て身を立つるに至つた経緯に就ては後に詳述するところであるが、少年時代繪畫に興味を有し、日本畫家樋口探月に師事し、又洋風畫を高橋由一の門人にして麴町に居住した細田季治に學んだことがあつた。而も、この巴里遊學に際しても母貞子の旅中の慰安にもとの注意により水彩畫の繪具箱を携帯し、船中に於て乗客の顔を寫生し、又巴里から母貞子へ宛てた書簡にも屢々巴里風俗等を描いて挿入してゐる。

彼は巴里到着後間もなく、當時開會中のサロンを見學し、次の如き記録を遺してゐる。即ち、

五月二十二日木曜 本日ハ當地ノ祭日ノ由ニテ終日休業也。併シ朝五時ヨリ八時迄ノ稽古ハ有リタリ。朝食後久松氏トジヤルダンチュリ公園ニ入リタリ。(中略) 余ハ別レテ獨リ畫ノ見物ニ行キタリ。此ノ畫トハ此ノ頃畫ノ共進會ノ如キモノ有リ其ノ見物也。畫數甚ダ多クシテ善惡ヲ評スルニ勝ヘズ。其内日本人ノ畫一ツ見出シタリ。是レハ(日本人ガ描キシカ又ハ西洋人ガカキシカ知ラザレトモ)日本ノ宮内省ノ女中ノ様子ニテ、例ノ平タキ頭ニ大禮服ニ木ノ扇子ヲ持チ坐シ居ル處ノ風也。甚ダ良ナラズ(多分日本人ガ畫キシナラン。立タル風ナラ坐セシヨリ少シハ良カリシナラント想像セリ)(註四)

と。顧ふに、此の時佛蘭西に在留した吾が洋風畫家には山本芳翠と五姓田義松が在り、果して兩者の中何れの作品なりしやを詳にしながら、當時専門家ならぬ黒田がサロンを見學し、而も、辛辣な批評を加へてゐることは興味あることである。

又後年彼自身の語るところに依れば、渡佛後間も無く郷愁にかられ、歸心矢の如くであつたが、一夜日本に歸國したる夢を見た。友人が集り來つて歓迎してくれたが、省れば未だ何物をも學ぶところなくして歸國したので、自責の念に耐へずして家門をくぐる事が出来ぬところで目覺めた。爾來奮然志を立て、歸國の念を斷つて勉學したといふ。(註五)

此の年七月には、久松氏と共に特に教師を招聘して西洋流の劍術の習

練を始めた。(註六)

夏に入り、ゴツファル塾も休暇となり、彼は八月初旬より十月一日迄の間ロウル・ビロン街の橋口直右衛門の宿所に移り住んだ。而して、八月中旬には明治十一年來巴里に滞在してゐた山本芳翠と初めて相見ゆる機會に遭遇した。芳翠は當時巴里に於て畫家として著名であつたが、又料理の名人として知られ、多くの在留日本人が彼のもとを訪ねその手製の日本料理を賞味するのが常であつた。黒田も亦橋口直右衛門に伴はれて芳翠を訪ひ、芳翠の日本料理を賞味したのであつた。(註七)斯く黒田と芳翠とは初め藝術以外に於て相識つたのである。

而して、此の休暇中黒田は父清綱の像を寫眞に依つて描き、これを東京の自宅へ送つた。此の頃から彼は趣味的に製作を試みたが、既に此の時彼の作品を見て繪畫の習練を慫慂する者もあつた。(註八)

十月初旬開校と共にゴツファル塾へ歸つたが、此の年の暮には婦人の肖像等を描いた。

此の頃は一週三度一時間位づつ描いてゐると記してゐる。(註九)

明治十八年(西紀一八八五年)彼と同行して巴里日本公使館に赴任せる橋口直右衛門は、此の年初より病を得て遂に七月に至り歸朝し、其の後専ら彼の學業及び生活上の相談相手となつたのは公使館書記生松方正作氏であつた。八月に入りゴツファル塾も休暇となつたので、彼は公使館所在の邊りイエナ街の旅館に移り住んだ。此の頃の作品に鉛筆素描の

第一圖 黒田清輝筆 婦人像

美術研究所藏

自畫像(美術研究所藏^{高四〇厘}幅三二〇厘)がある。克明に寫した顔貌及び衣服の描

寫は未熟のものではあるが、彼の初期の肖像畫作品として注目せねばならぬ。而して、これには「紀元二千五百四十五年八月四日寫 於巴里府家名町旅店 黒田清輝」及び Kourouda, Paris, Le 4 Août 1885 なる款記がある。(註十)又、八月下旬には藤雅三・松方正作と共にジユイ・アン・ジョザスに遊んだ。

而して、此の頃ゴツファル塾が十月を以て他塾へ併合されることとなつたが、自然同塾を退くに至つた。斯くして、九月には更にサン・ミシエル街の旅宿へ移り、又アルカンボウなる教師を聘し、佛蘭西語及び羅旬語の教授を受けた。

十月に入り、公使館附武官寺内正毅及び松方正作の斡旋に依りバツシイ街なる官立中學校(リセー・ジンソン・サイイ)の文科第五級に入學した。これは、中學校と高等學校の中間程度のものであつたが、前年閑院宮載仁親王の御在學あらせられし學校であつた。彼はこれと同時にトロカデロ街の某佛蘭西語教師の邸宅に移り住んだ。(註十二)而して、此の學校に於ては一週二日畫學を授けた。併し、これは極めて初歩のものであつた。

然るに十二月に至り、リセー・ジンソン・サイイを退き、再びアルカンボウを聘して佛蘭西語其他の個人教授を受けた。これはリセー・ジンソン・サイイの教課が、羅旬・希臘語が中心であり、彼の希望した佛蘭西語の修練に不自由であつたためと、此の課程を経て更に大學校を卒業するに餘りに時間を要するが爲めであつた。彼は退學と共にラシイヌ街へ移つた。(註十二)

然るに、此の年彼が西洋畫研究に入るべき動機となつた一事件が起つた。それは洋風畫家藤雅三(嘉永六年頃—大正六年頃)が巴里に留學し來つたことである。藤雅三は工部美術學校に於てアントニオ・フォンタネーヨ Antonio Fontanesi 及びサン・ヂェヴアンニ A. San Giovanni に學び、明治十六年一月同校を修業し、更に工部省の留學生として此の年春巴里に到着した。而して、其の後彼はリュクサンブール美術館に收藏されて著名であつたルイ・ジョセフ・ラファエル・コラン Louis Joseph Raphael Collin (1850—1916)の「花月」Floralなる湖畔の草原に横臥せる裸體の女性を描いた作品に敬服し、コランに師事することとなつた。然るに、佛蘭西語の不自由であつた藤はコランの言葉を充分に解し得ず、爲めにその通譯の勞を黒田に依頼し、斯くして黒田も亦コランと相識るに至り、遂に後には彼も亦コランの薰陶を受くることとなつたのである。(註十三)

明治十九年(一八八六年)に入り、彼は法律大學校及び佛蘭西學校に赴き法律學・經濟學等の講義を傍聽したが、更に二月にはモンルージュ街のミルマンなる老人の私塾に入り、専ら法律大學校入學の準備に努めつつあつた。

然るに、此の年二月日本公使館に於て、在留日本人會の初會合が催されて其の席上彼は山本芳翠・藤雅三・林忠正に會し、彼等に寧ろ法律を學ばんよりは西洋畫を研究し、國家の爲め貢獻すべきことを頻りに勧進された。即ち

(前略)公使館に於て、一ヶ月一度づつ日本人の會がある事に相成、去る七日が初會にて御座候。山本(當地在留の畫工)、藤(工部大學卒業生にて同工部省)、林(當地在留の日本畫其の他諸古物)

などの商人、先づ(註十四)の諸氏が日本美術の西洋美術に及ばざるを嘆じ、私に畫學修業をしきりに勧め申候。且つ私に畫の下地あるを大に譽め曰く、君にして若し畫學を學びたらんにはよき畫かきとなるや必せり。君が法律を學ぶよりも畫を學びたる方日本の爲めにも餘程益ならんなど、迄申候故少しく畫學を始めんかとも思ひ居候。固より、好きの事故少しく勉強したらんには進歩可致と存候。(後略)

と父へ報じてゐる。(註十四) 而して、彼は此の春には屢々藤雅三と巴里郊外に寫生に赴き、鉛筆に依て風景を寫し、藤の指導を受けた。即ち、四月下旬のバーク祭には、イヴリーのビエル村 Bierre, Ivry へ赴き最初の寫生帖に鉛筆畫を遺してゐる。而も五月に至つて専心畫學を研究せんとする意慾は次第に動き始めた。彼は父へ宛てて

(前略) 私事法律學を修業致し候積にて只今迄只語學のみを勉強仕候得共、能く々々將來の事を相考へ申候に、如御意今日は已に法律家も多き世中に御座候間、普通の法律學を學び得て歸國候とも左程國益にも相成申間敷と被存申候。(中略) 法律専門にて國益になる程の事を爲さんは、餘程六ヶ敷被存候。依而、今般天性の好む處に基き斷然畫學修業と決心仕候。(中略) 何學にても一通迄は皆々相達し可申候得共只難きは少しく人の上に出る事に御座候。又畫學は他の學問と異ひ、何年學べば卒業すると云事は無之、年の長短は只其人の天才に依る事に御座候。私一度決心致し候上は、一心に勉強可仕候。其決果の好惡は只天に御座候。(後略)

と其の決心を披瀝してゐる。(註十五) 而して、同日附の母への書簡に依れば、これより嚮父清綱は彼の成就し得るものの完成を期待する旨を彼に傳へた。

斯くて、彼は五月二十二日豫て相識るコランに其の目的を述べ、彼に師事することとなつた。而して、爾後コランの指圖に従ひ、ルウヴル美

術館の希臘彫刻等の摸寫を開始した。最初は其の週に描きたるものに就き週末一回コランの批評を受けた。

而して、茲に黒田をはじめ藤雅三、或は久米桂一郎の師事したラファエル・コラン Louis Joseph Raphael Collin に就て簡單に記さう。コランは一八五〇年巴里に生れた。彼は巴里の美術學校に於て、初めブウグロウ Bouguereau, Adolphe William (1825—1905) に、次でカバネル Cabanel, Alexandre (1823—1889) の指導を受けた。一八七三年初めてサロン・デザルテイスト・フランセエズに「休息」(ルウアン美術館藏)を出品し二等賞牌を授與された。其の後、年々サロンに秀作を出品したが、一八八六年にはその「花月」(花月)がリュクサンブール美術館に收藏された。而して、一八八九年の巴里萬國博覽會に於て金牌を贏ち得、又此の年にはソルボンヌ大學の壁畫及びオデオン座の天井畫を完成した。更に一八九八年から翠年に亘り、オペラ・コミック座の天井畫の製作に當つた。一八九九年以來サロン・デザルテイスト・フランセエズの審査委員となり、又一九〇二年以來美術學校教授となつた。(註十六) 次に、彼の畫風は、その初期に於てはカバネルの薰陶によつて古典的であり、色彩も褐色及び黒色を主調としたが、更にヴェネツィア派の強い色調による陰影の効果を研究した。然るに「花月」の成る前から外氣中の微妙な色彩の階調に注目するに至つた。これは、彼の兩親と同郷であり彼と親しかつたバステイアン・ルバージュ Bastien-Lepage (1848—1884) の感化に依るものと思はれる。コランとバステイアン・ルバージュは其の主題の好尚に於て異り、コランの純粹な古典趣味に依る理想畫に對し、バステイアン・ルバージュはまた田園生活を描いてゐるが、コランの場

合に於ても、其の裸體或は人物は常に庭園等を背景とした外光の中に描かれ、此の外光描寫の原理に於て感化を受けたのである。斯くして、彼は外光下に於ける裸體の肉色を描き、又潤ひある色調を以て緑の青白い感じを表はした。(註十七)

而して、黒田が入門した時コランは未だ三十六歳の青年畫家であつた。コランは黒田を愛したが、又彼を通して人物寫生に用ふるための日本の裂地を求め、又花を愛する彼は、爾後年々黒田の斡旋に依て日本の牡丹・菖蒲・百合等を得て其の花壇を飾つた。

此の年七月中旬、黒田は藤雅三と共にガルシユに遊んだ。次で下旬には當時ブリュクセルに在つた松方正作の巴里に來遊せるを機とし、これに伴はれて白耳義ブリュクセルに遊んだ。斯くして、八月中をブリュクセルに過し、九月に入つてブリュージュに遊び、此處より海岸の避暑地ブランケンベルグ Blankenberg に至り數日滞在した。此の間に、松方氏の知人ヴァン・ハルトラン Van Halteren 家の人々を知つた。次で、オスタンド Ostand ガン Gand アンヴェルス Anvers を經て和蘭の首都ヘーグに入り、同地日本公使館に滞在した。ヘーグに十餘日を過してゐる間に、アムステルダムを訪ひ、九月十七日には再び白耳義ブリュクセルに至り、十月一日出發巴里へ歸つた。(註十八)

此の二箇月餘に亙る旅行に於て、彼は白耳義・和蘭兩國の主要都市を遊歴し、主なる美術博物館にフランドル派・和蘭派等の作品の研究を遂げた。

而して、歸巴後再び彼は畫學にいそむこととなつたが、十月十一日より更にコロロシイ畫學校(註十九)内のラファエル・コランの教室へ

正式に入校した。嚮に、ルウヴル美術館に於て古代希臘彫刻等の素描による研究を遂げた彼は、午前八時より十二時迄モデルに就て素描の習練を試みた。當時コランの教室に學べる者は凡そ十名位であつて、其の中日本人は藤雅三・久米桂一郎及び黒田の三名であつた。爾後、黒田の莫逆の友として、滯佛中は生活と研究を共にし、歸朝後は相携へて吾が美術界に貢獻した久米桂一郎は、明治十七年以來東京に於て藤雅三に就て洋風畫を學びつつあつたが、藤の巴里留學の後を追つて巴里に來り、コランに師事したものである。而して、久米は藤の紹介に依つて黒田と相知つた。久米が、アンステイテユウシヨン・ミルマンを尋ねて初めて黒田に會つた時は、黒田は丸々と肥つた元氣の好い穩和な少年であつたと云ふ。(註二十)

當時コランの研究所はアカデミー・コロロシイの一部に在り、コランは毎週火曜及び土曜の二回教授にあたつた。黒田等は其最初は裸體寫生のみを課せられた。當時素描には、木炭或はコンテが用ひられたが、コランの教授方針としてはコンテとストーンを用ひて地を塗る素描を探らず、専ら木炭に依て描く方針を探つた。(註二十)

黒田はコランの研究所に通學すると共に、十一月に入つては更に法律大學校に通學し、又別課教師としてオルシエ氏を聘し法律學を學んだ。即ち、此の時代に於ては猶ほ法律の研究を放棄したのではなく、法律と共に畫學の習練を試みてゐたのである。父清綱に宛てて其頃の心境を次の様に記してゐる。即ち

去る三日より大學校通學も相始め申候に付、近頃は甚だいそがしき事に御座候。畫も不惰勉強致居候。學力なき時は畫道にのみ達し候ても只畫工たるに

不過と存候に付、先は當分は學問を爲し、傍畫を學び、一人前の人間と爲りたる後、専ら畫を學び而望を達せんと存候。月日を重ねるにしたがひ、志のみ次第に大きく相成候故、定而御心配被遊候半と奉存候。乍併能々相考申候に貧富は只一世死後の名に目を附るこそ男子なりと奉存候。(註二十二)

斯くして、彼は十月末日限りミルマン塾を去り、久米桂一郎の宿れるルユ・ドランプル町の旅亭に轉じ、久米との共同生活に移つた。此處からはアカデミー・コロロシイは極めて近く、法律大學校も亦二十分位の距離であつた。而して、此の年の十二月頃、藤の注意により、久米と共に林檎や葡萄を寫生しながら油繪具の調合法等を習つた。當時、藤はモン・ルウジユ市場附近の畫室に於て後に彼がサロンに出品した「破れズボン」の製作に著手してゐたと云ふ。(註二十三)

(註一) 黒田清輝日記(明治十七年)。明治十七年二月十一日附及三月二十一日附清綱宛書簡等。

(註二) 同前、及び四月四日附清綱宛書簡。又明治二十五年日記帳中に記載せる巴里アンスティチュウシヨンの紹介に據る。

(註三) 久松定談、伯爵、慶應三年九月松平勝實の二男に生れ、後舊松山藩主久松家の養嗣子となる。明治十六年佛蘭西に留學し、サンシール兵學校卒業、同二十二年少尉に任官、大正九年陸軍中將に陞る。

(註四) 明治十七年日記の中。括弧内は五月二十二日附母貞子刀自に送れる同日記寫本にて補へり。

(註五) 大給近清氏談「黒田先生の嗜好」(國民美術、第一卷第九號黒田清輝先生追悼號)

(註六) 七月十日附父宛書簡。

(註七) 八月十四日・八月二十八日附母宛書簡。

(註八) 九月二十六日附母宛書簡。

(註九) 明治十九年一月八日附母宛書簡。

(註十) 和田英作氏「黒田先生のスケッチブック」(美術研究第六號)

(註十一) 明治十八年十月十六日附父宛書簡。

(註十二) 明治十九年一月十五日附父宛書簡。

(註十三) 黒田清輝「コラン先生追憶」(美術、大正五年十二月)及び同「逝けるコラン先生」(中央美術、大正五年十二月)。藤のコラン就學の経緯には尙後考に俟つ點あり。

(註十四) 明治十九年二月十日附父宛書簡。

(註十五) 明治十九年五月二十一日附父宛書簡。

(註十六) Thieme u. Becker: Allgemeines Lexikon der Bildende Künstler.

其他に據る。

(註十七) 黒田清輝「コラン先生の追憶談」(美術新報、大正五年十二月)、久米桂一郎

「コラン先生追憶」(美術、大正五年十二月)。

(註十八) 明治十九年七月三十日、九月十二日附母宛書簡、十月八日附父宛書簡。

(註十九) 伊太利亞人コロロシイの經營せる畫學校で、コランのほか教師三四人があり、夫々別に教場を持つてゐた。(黒田讓著「名家歴訪録」中編)

(註二十) 久米桂一郎「亡友黒田清輝と佛蘭西に居た頃」(美術新論、昭和七年二月)。

(註二十一) 「久米桂一郎氏の手簡」(大日本美術新報、第四十三號)。

(註二十二) 明治十九年十一月五日父宛書簡。又次の便の十一月十九日附の父宛書簡にも同様の意見を開陳してゐる。

(註二十三) 久米桂一郎「佛國修學時代の黒田君と其制作」(中央美術、第十卷十二號大正十三年十二月)同「黒田清輝君の藝術」(國民美術、大正十三年九月一日)。

十一

明治二十年一月彼は佛國代理公使原敬等の斡旋に依て、法律大學校に正式に入學を許可された。而して、前年來法律別課教師としてオルシエを聘して授業を受けつつあつたが、此の年三月改めて、法律大學校刑法教師レイエの紹介に依て元老院議官にして嘗て司法大臣を勤めたカゾの教授を受くることとなつた。(註一)

併し、斯く彼は法律研究に従ひつつコロロシイ校に在つて學業多忙の時、夜、其の他は午後數時間をモデル或は石膏像の素描に費すと共に、時に繪具を用ひて製作を試みた。(註二) 又其の寫生帖(美術研究所藏第二

號)及び書翰に依れば、二月下旬以降數回に亙つてフォンテンプロオ等に遊んで寫生してゐることを知る。

而して、四月八日彼はリュ・ドラムブルの客舎よりポオル・ロワイヤール通 Boulevard de Royal の八十八號に貸室を求め、其處に移つた。其處には二つの室と小さな臺所とがあり、久米と共に或は室内で靜物を描き、或は自炊する等親密

な生活が續けられた。(註三)而も、此の頃に至り畫學を專修せんとする熱望は愈々熾烈となつた。既に此の冀望に就て前年來父清綱へ訴へたことは述べたところであるが、巴里に於ては僅かに藤・久米の兩者がこれを理解してゐたに過ぎず、後見人の如き立場に在つた當時の代理公使原敬にも未だ傳へてなかつた。彼はその

書簡に、更に畫學或は畫家に就ての率直な見解を披瀝してゐる。即ち

(前略)私始めは畫學の如きは只賤しきものとのみ存じ日本にて細田氏に從而稽古致し候時も中途にて打ち止め申候。之れと申も、日本に在りし時は(日本_書の風と)只一度は政治社會に名を擧げん事をとのみ望み、參議のみが人間なる様な感覺を有し候故に御座候。併し、能々相考へ候に畫學と雖ども何にも賤

圖二第 藏家學術美京東 圖剖解 筆トンラブルレ 寫換輝清田黑

しき事はなく、其極上手と云處迄やり付くれば矢張大臣になりたるに異ならず、且畫學の如きは、天物即ち山水草木畜獸等を友とし師とするもの故餘程氣樂にして、五十年の一命を愉快に終るには此の業に優るものは有るまじくと存候。又當地にて法律博士を得て歸りたる日本人も已に二三人有りと承り候得共、畫學共進會にて賞狀を得たる日本人一人も無く、依て私事専ら力を

圖三第 筆輝清田黑 描素上同 藏家田黑(繪挿簡書)

畫學に盡し、實の畫かきと云迄に至り候得ば、只一身の爲めのみならず、且國家の爲めならんかと奉存候。併し此の畫學は法律など、異なり、何年にて卒業するなどと申事は無御座候。三四年も學び一通りの力を得た後は只天然物を師として研究し、上手になるも、へたで一生を終るも皆天命に御座候。(後略)(註四)。

五月に入り、長く巴里留學中であつた洋風畫家山本芳翠、洋風木版畫家合田清及び林忠正は共に出發歸朝の途に就いた。黒田は豫て畫ける習作木炭畫を主とせるその作品を合田に託して、兩親のもとへ送つた。

六月彼の養父清綱は維新以來の功勞に依り華族に列し子爵を給ふた。七月歐米巡遊中の海江田信義巴里に來り、黒田の法律學の師カゾに就

て佛蘭西の法律の講議を毎日一時間づつ聞いたが、其の際黒田は通譯の勞をとつた。又コロロシイ校も休暇に入つたため、彼は久米と共にルウヴル美術館に至り、古畫の摸寫に努めた。

而して此の年八月に至り、彼は從來の法律學・畫學を併せて學ぶことを放擲し、畫學を専修し生涯の業とする決心をなした。其の動機となつたのは、當時巴里留學中の哲學者井上哲次郎に邂逅し、その所論を聞いたことである。井上は、一時に二つの業を修むることは共に未完成に終るべく、若し志すところが畫學に在るならば法律學は放擲して畫學に専念すべきである。又志すところは畫學にして精神的學力を補はん爲めならば、畫には無關係の法律學の研究の如きは中止すべきである。繪畫は其の作者の精神の反映である、精神高尚ならざれば其の畫くところ品格を失ふ。従つて精神を高尚ならしめんとせば、法律學を以てしては難く、寧ろ古今偉人の評傳或は最も高尚なる詩文を読むべきであると。茲に於て、彼の決意は愈々定まり、その旨父清綱に傳へた。(註五)

斯くして、彼は八月初旬より九月下旬に亙つて夏の休暇を利用して巴里を離れ、トレポールより白耳義に遊んだ。即ち八月十日巴里を出發し、佛蘭西北岸のル・トレポール Le Treport に赴き、暫時滞在した。(註六) 此の地には彼の巴里に於ける知人レール氏があり、又此の地は海水浴場として聞え、メルス村に續く其の邊の海岸の絶壁と濃紺の海色は彼の畫興をそそるものがあつた。彼はその寫生帖(美術研究所藏第三號)に此の附近の寫生を遺してゐる。續いて、彼は八月三十日トレポールを出發し、カレー Calais、ダンケルク Dunkerque を經由し、翌三十一日白耳義ブランケンベルクに到着した。此の地は既に前年の夏訪れたところで

あつて、ヴァン・ハルトラン家の食客となつて凡そ旬日を此の地に過し、次で、ブリュクセル府に至り同じく旬日滞在し、九月二十日の夕巴里に歸來した。

以上四句に亙る彼の旅行を顧るに、此の間彼は北佛蘭西より白耳義諸地に遊んだが特に纏つた作品は無かつた。當、前に述べし如く、其の寫生帖第三號に北佛蘭西の風景と、白耳義に於ける彼の知人特にヴァン・ハルトラン家の人々と思はるる男性及び女性の鉛筆素描の肖像があり、極めて巧みに描かれてゐる。(挿圖第一圖参照) 而して、此の旅行に於て更に其の生涯の仕事に就て沈思し、愈々來るべき秋より畫學のみを専攻すべきことを決意したことは特に注意すべきであらう。

巴里に歸つた彼は、十月初旬より法律大學校を退き、専心コランのコロシイ校に於て研究を續け、更に夜は夜學校に於て素描の習練を重ねた。而して、此の頃に至つて彼は初めて其の後見人の立場に在つた公使館書記官原敬に、法律學の研究を中止し、畫學を専修すべき彼の決意を披瀝して同意を求めた。然るに原敬は、現代は理論の時代なれば、彼の如き人物が名畫家となるに及ばぬ事にて、素志の如く法律を學ぶ方よろしかるべし。若し、繪畫に興味を持つといふならば、法律學士の免狀を得て後繪畫の習練をなすとも遅くはあるまじと説いた。併し、屢々述べ來りし如く、彼の此の決意は既に決定的であり、原敬の意見の如きは既に再三説かれて來た事と思はれるので、彼は

右當時官吏等世間なみの意見と奉存も、併し私は感服不仕候。

と父清綱に書き送り、更に畫學を専攻すべき理由を縷々述べたのであつた。(註七)

他方、此の年歸朝せる山本芳翠も豫て彼の畫才を愛し畫學を專攻することを從進せることもあり、歸朝後は佐久間貞一をして清綱子に向つて黒田をして畫家たらしむべしと説かしめた。斯くして、父清綱も全く同意するに至つた。

斯くて、彼は漸く本格的な習練を積み、此の年暮の競技會に於ては素描に於て首席を占めた。(註八) 今日、美術研究所に收藏する此の時代の男女裸像素描習作は其の努力を示すものである。

而して、此の年十月には公使蜂須賀侯の後任として田中不二麿子が來任し、これに隨行して羅馬より畫家松岡壽が巴里へ來遊した。又この年の終り頃には、東京より彼の義兄橋口文藏が歐洲巡遊の途次巴里に來遊し久し振りに肉親に面會した。而して、橋口氏に依つて父清綱の意見も十分に傳へられた。彼は清綱へ宛てて

(前略) 同人にもひたすら畫學へ精神を込られ餘程満足にて勉勵致し被居候間他日成功之日は今日より期して待たれ候事と信認仕候間御安心被遊候而可然と奉存候(後略)

と報じてゐる。(註九)

又此の年十一月二十九日附を以て黒田は從五位に叙せられた。

(註一) 明治二十年一月二十一日附及三月十八日附清綱宛書簡、

(註二) 同三月十一日、三月二十日附貞子宛書簡、

(註三) 同四月八日附父宛書簡、久米桂一郎「佛國修學時代の黒田君と其制作」(中央美術、第十卷十二號、大十三年十二月)

(註四) 同右父宛書簡、

(註五) 八月五日附父清綱宛書簡に

「(前略) 當地ニ當時滞在シ居らる、哲學士井上鐵次郎ト申人より、先日色々私目的上ノ事ニ付説諭ヲ受ケ、實ニ感服仕候、同氏ノ説ニテハ一人ニテ二ツノ業ヲ修むるハ、到底首尾ノ取る、話ニ非ズ。二ツノ走兔ヲ一時ニ獲ントスルニ似テ、只時間ヲ費シ其功ナ

キモノナリ。依テ志ス所畫ニ在ルナレバ、法律ハ斷然打テ棄テ、一心ニ畫ヲ學ブニ如カズ。又志ハ畫ニ在レドモ、精神上ノ學力ナキ故一時法律ヲ學ブト云フガ如キハ最モ誤ナリ。其故ハ、畫ナルモノハ一ノ職業ニ非ズ。學問中最モ高尚ナルモノ也。法律ノ如キハ俗吏ノ業、少シモ畫學ニ關係ヲ有スルモノニ非ズ。關係なきものを學ンデ何ノ益カ有ル。抑畫ナルモノハ人ノ精神ヲ顯ハス者也。精神高尚ならざれば其畫ク所自ラ賤シ。依テ精神ヲ高尚ならしめんとするハ畫學ニ取リテハ要なるものなれども、法律學ヲ以テ之レヲ養ハントスルコト難シ。寧ロ古今英雄豪傑ノ傳或ハ詩文ノ最高尙ナルモノヲ讀むニ如カズ云々。能々勤考仕候處實ニ井上氏ノ説ノ如ク、畫學ニ志シナガラ法律ヲ學ブハ于闕千萬ナル事ニ御座候世間ノ俗務ニ其精神ヲ委る時、其畫ク所俗ナルヲ免カレズ、畫ニシテ俗ナル時ハ畫ナキニ同然、右ノ次第故此ノ休暇後よりは斷然一方ハ打棄、畫ニ必要トなるもの、みを一心ニ學バンものと相考居候。御尊意奉伺上候(後略)。

(註六) トレボール紀行。八月十二日。八月二十五日附父宛書簡。

(註七) 十月二十一日附父清綱宛書簡。

(註八) 十二月二十八日附母宛書簡。

(註九) 明治二十一年一月一日附橋口文藏差出し清綱宛書簡。

三

明治二十一年(一八八八年)に入り、從來木炭畫のみの習練を試みてゐた彼は、コランの許可を得て、初めて學校に於て油繪の習練を開始した。(註一) 而して、一月下旬より二月に亙つて凡そ旬日の間、巴里近郊のジュイ・アン・ジョザスに赴き製作を試みた。もと此の地に某富豪の別荘があつて、其處に日本家屋と庭園があり、この日本家屋を建てた大工伊藤源兵衛なる者が巴里にゐた。此の伊藤の案内に依つたものであり、久米も同行數日滞在した。(註二)

ジュイ・アン・ジョザスに於て彼は幾つかの習作を試みた。彼の油繪作品中最も初期のものと思はれる「田舎家」(美術研究所藏 幅五二・七厘)の如きも此の時の製作である。此の「田舎家」は彼が滞在中食事してゐた

田舎飯屋の裏庭を描いたものであり、納屋の裏の積藁の邊りに數羽の鶏が遊んでゐる圖であつて、褐色系の色調を以て纏められてゐる。(P.L.VI.「參照」)此のほか、此の飯屋の娘の肖像、老婦の肖像或は雪景色等を描いた。

此の年三月、彼と同宿せる久米桂一郎は、西班牙バルセロナに開催された萬國博覽會に日本事務局の職員として出張し、會期後も更に西班牙



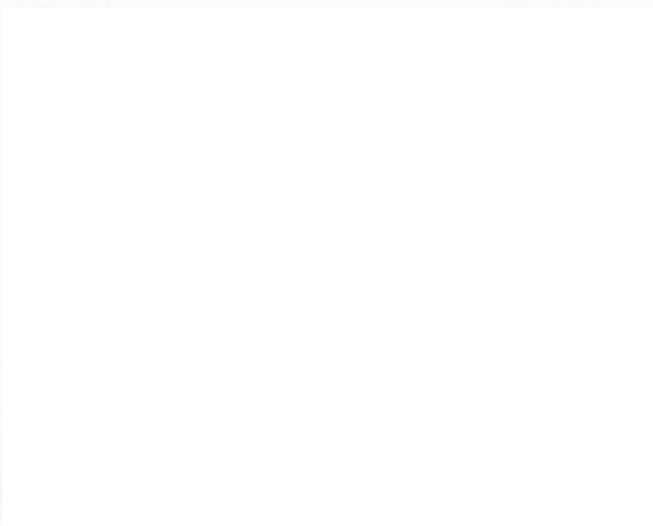
圖四第 黒田清輝筆 針仕事圖 水上嘉一郎氏藏

牙諸都市を巡歴して翌年三月歸巴したので、黒田は寂寥をかこつた。只巴里留學中の川路利恭が彼の宿に在つたので稍々慰められた。

五月に入り、後に彼の製作地となり、記念すべき多くの秀れた作品を描いた巴里近郊のグレー *Grèz-sur-Loing* に初めて遊んだ。即ち五月五日、彼は學友の亞米利加人畫家の案内に依り巴里來遊中の橋口文藏と共にグレーに至り、數日を此處に過し、野原や牛の圖等を製作した。更に

一兩日をおいて再びグレーに遊び、凡そ二週間滞在、専ら風景の寫生に耽つた。グレーは片田舎ではあつたが、當時美術家等に知られ、來遊者は多く畫家であり、而も、佛蘭西人よりは寧ろ亞米利加及び英吉利の畫家が多かつた。(註三)

六月初旬、彼は新に畫室を借りて製作に勵んだ。而して六月下旬には



圖五第 黒田清輝筆 編物・レグ風景・レグの女 合田弘一氏藏

コラロシイ校が休暇に入つたために、特にモデルを雇ひ習練を續けた。又七月には巴里に留學し來つた洋風彫刻家大熊氏廣が彼の旅宿に來り同宿したために賑やかとなつた。

八月に入り、彼は巴里を去つて例年の如く白耳義の海濱プランケンベルクのヴァン・ハルトランの家に投じ、八月中を同地に過した。此の間或は描き或は近郊に遊び、九月に入りブリュクセルを経て九月三日和蘭のヘーグに至つた。ブリュクセルからは松方正作・田中阿歌麿・中村次郎等が同行し、いづれも公使館に投じた。

ヘーグに滞在した彼は、此の間に同美術博物館のレムブランドの「解

剖圖」を油繪を以て模寫した。(註四) 今日東京美術學校に遺る作品がそれである。(挿圖第二・三圖參照) 斯くして、彼は九月二十三日ヘーグ發ブリュクセルに至り松方正作の邸に止宿、月を越へて十月二日巴里に歸つた。(註五)

十月、コランはコロロシイ校を離れ、自ら新しく校舎を構へて授業を開始した。従つて、黒田又新校舎へ移つて研究を續けた。又生來花卉に興味を持つたコランは、日本の草花の球根を従來主として藤雅三をわづらはして日本から求めたが、藤が結婚せるため黒田がその役を引受け、日本の百合を父清綱宛送附方を乞ふた。

十一月中旬、彼はバルビゾン Barbizon に遊び數日を過した。寫生帳(美術研究所藏第五號)にその風景等の寫生を遺してゐる。而して、歸巴後はコランの學校に學ぶと同時に一週二回美術大學校(École des Beaux-Arts)に於てマチアス・デュヴァル M. Devail の美術解剖學を聽いた。これは實物と對照しつつ行はれるので極めて有意義であつた。(註六)

而して此の年の暮即ち十二月二十三日より二十七日迄再び學友の英米

人畫家數人とバルビゾンに遊んだ。

明治二十二年(一八八九年)一月末日、彼は新しくヴォヂラール街のファヴォリット通二十六番 26 Passage des Favorites 271 Rue de Valenciennes にアトリエを求めて移り住んだ。此處は、巴里の場末であつて稍々不便ではあつたが、靜寂なることは彼を喜ばせた。又其の隣りには學友グリフィンがあり、又彫刻家バートレットがその表に小さなアトリエを持つてゐた。(註七) 彼は引續きコランの學校に學び、又美術大學校に解剖學を聽講し、又自らの畫室に於て室内圖等を描いた。今日美術研究所に收藏する「畫室の一隅」或は藤島武二氏の收藏する暖爐と寢臺等を描ける「畫室内」なる作品の如き、此の時代の作品であらう。

郷に巴里に留學し來り、彼と同宿してゐた川路利恭は、暫時伯林に在つたが、一月中旬再び巴里に歸り來つて彼の舊旅宿に住み、又二月に入つて永年彼の後見人として世話を見來つた公使館書記官原敬が巴里を去つて歸國し、更に二月下旬には凡そ一年の間西班牙に滞在した久米桂一郎が歸巴し來る等彼の身邊に多少の移動があつた。(註八)

此の年氣候溫暖となるや、彼は屢々近郊寫生旅行に出た。即ち四月八日より凡そ一週間フォンテンプロオの手前ブロール村 Brolles に學友にして英人畫家クラレンス・バード Clarence Bird (註九)と遊び、滞在、少女をモデルとして製作した。(註十) 又寫生帖第五號に少年・少女の寫生を遺してゐる。

又五月七日にはバード及びグリフィンと共にボアニユヰイル Boigneville に遊び、凡そ一箇月の間少女の肖像をはじめ風景を描いた。時恰も花の候であり、林檎・杏等の花が眞盛りであつた。(註十一) ボアニユヰ

第六圖 黒田清輝筆 郷の花 書簡挿繪 黒田家藏

イルは巴里より南方にあたり、フォンテンブローの西南エツソンヌ河の支流に沿ふた谷間の西側の崖地であり、當時人口四百人位の小村であった。村の中央に寺院があり、彼等はその近くの居酒屋兼旅人宿の二階を借りてしきりに製作した。彼等は此の旅宿の裏の崖の松の生へた上の場所、村の子供や羊の子等を寫生した。併し、彼等は多くの習作に努力したが、未だ此の時代にはいづれも大構圖の完成した作品は出来なかつた。黒田は、此の時より眞剣に郊外寫生を試みたと談つてゐる。(註十二) 而して、此の時の作品に「猫を抱ける少女」

第七圖 黒田清輝筆 讀書圖

(所在不詳)や「クラレンスバードの像」或は鐘樓のある風景等がある。

六月中は、概ね學校に於て習練した。此の頃、巴里に萬國博覽會開會され、彼も亦屢々其の美術館に通ひ各國よりの出品作品を觀た。マネの傑れた作品が出陳されたのも此の時であり、漸く此の頃から印象派が巴里畫壇に迎へられた。(註十三) 而して、

黒田は特に驚嘆すべき程の作品を見出さず、管コロオ、ミレー、テオドル・ルツオ等のバルビゾン派の作品のみが注目し値すると報じてゐる。(註十四) 而して、此の博覽會のために雇はれて出てゐる日本娘を久米と共にモデルに備ひ描いた。

七月に入り、コラロシイ校も夏休暇となり、彼は再びバード、グリフインの兩者と共にボアニュヴィルに遊び製作に耽つた。此の間暫時巴里に歸り、英吉利等より博覽會見學のため來遊した日本人を案内したが、

八月初旬迄此の地に滞在し、前のボアニュヴィル遊行の時描ける室内にて七八才の少女と八九才の子供が針仕事をなせる圖を改めて本格的に製作した(註十五)。此の作品は、今日水上嘉一郎氏の收藏する「針仕事圖」(高三九・八種)に該當するものと考へられるが、窓下の椅子に倚つて針仕事する女と、後向きに腰懸けた子供が描かれてゐる。共に青色の衣服を纏ひ、窓外の樹木は印象派風に描かれてゐる。(挿圖第四圖参照)左上隅に Seiki Kouruda の署名があり、猶ほ年紀があつたものと考へられ

美術研究所藏

るが今日判讀し難い。(註十)

次で、八月十三日彼は巴里を出發、例年の夏休暇の如く白耳義・和蘭遊行の途に就いた。

即ち、此の夜ブリュクセルに到着一泊の後、ブランケンベルグに向ひ、ヴァン・ハルトランのもとに到つた。此の地に八月中滞在、九月二日和蘭海牙府に至り、代理公使島村氏のもとに投じた。而して、滞在中美術博物館に

於てレムブラントの著名なる「肖像」の模寫を完成した。(註十七) 今日東京美術學校に藏するところである。而して、十月二日海牙府を出發、ブリュクセルを経て十月四日巴里に歸著した。

巴里に歸つた彼は、十月中旬より再び學校に通學したが、十一月には公使館附の八田某の肖像畫を依頼に依て描いた。此の製作にあつて八田氏は屢々彼の畫室を訪れたといふ。

巴里歸來後彼は、久米の宿所に宿つて寢食を共にしつつあつたが、十

一月下旬ヴオージラールのセルヴァンテス街一番地 I Rue Cervantes, Vaugirard の新築の建物に移り住み、久米と同居した。彼等は三階のバルコンからエツフェル塔やアンウアリッドを見晴す陽気な三室を借りた。此處には臺所もあり、日本料理を試みるにも恰好であつて、彼はその後屢々グラーに旅行し又後には殆んど其處に定住したが、歸朝の前年即ち明治二十五年秋まで此處を本據としてゐた。(註十八)

而して、此の時代の作品に「畫室にての久米氏像」及び二つの自畫像がある。「畫室にての久米氏藏」(美術研究所藏 高四七・七種 幅四五・七種)は、畫室の中央に畫架を立てて咲き香ふ數株の机上の菊花を寫生してゐる圖であつて、印象派風の描寫を試みてゐる。(PL. VIII, 1 參照)

又二つの自畫像は共に左斜横向に描かれ、一は和服・無帽であり、一は土耳其帽を被り、洋服を纏ふ。前者(黒田家藏 高三一・〇種 幅二三・五種)は、その童顏の表出に特徴を持ち、その傳彩又重厚である。特にその背景には金箔を用ふる等の技巧をこらしてゐる。左上隅にその紋章と共に S.K. Paris, Liver, 1889, dans mon appartement de la rue Cervantes の記載があり、セルヴァンテス街の新居へ移つて間もなくの作品なるを知る。(PL. VII, 1 參照)次に、土耳其帽の自畫像(美術研究所藏 高四九・六種 幅二九・八種)は、其の顔貌の細部に於て前者に類似するが、筆觸は荒く、殊に衣紋に於て塗り残しがあり、其の色彩又淡く、習作的に描かれてゐる。(PL. VII, 2 參照)而して、此の作品には年紀はないが、前者と略々同時代の作品と考へて大差ないであらう。

(註一) 明治二十一年一月二十日附父宛書簡。

(註二) 一月二十六日・二月九日附母宛書簡。久米桂一郎「佛國修學時代の黒田君と其

滞佛中の黒田清輝

制作」(前出)

(註三) 五月十一日・六月八日附父宛書簡、五月十八日・同二十五日附母宛書簡。

(註四) 「黒田清輝作品全集」、坂井犀水氏著「黒田清輝」等の明治二十二年の作とせるは何れも誤。

(註五) 八月十七日・九月五日・九月二十日・九月二十八日附父宛、八月二十四日・九月十三日・十月五日附母宛、八月二十五日・十月六日附大熊氏廣宛書簡。

(註六) 十一月十六日・十一月三十日附父宛書簡。

(註七) 明治二十二年二月一日附父宛、同二月六日大熊氏廣宛書簡。久米桂一郎「佛國修學時代の黒田君と其制作」(前出)

(註八) 一月十七日・二月二十八日附母宛書簡及び三月五日附大熊氏廣宛書簡。

(註九) クラレンス・バードは英國畫家であつて、コラン門に於て黒田と共に學んで親交あり、屢々共に巴里郊外に寫生旅行を試みた。

(註十) 四月十二日・同十九日附父宛書簡及び黒田清輝「舊友クラレンス・バード」

(光風二ノ三)

(註十一) 五月十日附父宛、五月十二日・同二十四日・同三十一日附母宛書簡及び黒田清輝「舊友クラレンス・バード」(前出)

(註十二) 黒田清輝「舊友クラレンス・バード」(前出)

(註十三) 久米桂一郎談(美術新報、明治四十三年一月一日號)

(註十四) 六月二十一日附大熊氏廣宛書簡。

(註十五) 七月五日・七月十八日附父宛、七月二十五日・八月八日附母宛書簡。

(註十六) 猶ほ此の圖を後年ベンを以て描いた作品に一八九〇年と年紀を加へたのは彼の記憶違である。又彼の稿せる「舊友クラレンス・バード」(前出)、或は久米の稿せる

「亡友黒田清輝とフランスに居た頃」(美術新論、昭和七年二月號)「佛國修學時代の

黒田君と其制作」(前出)、或は坂井犀水氏著「黒田清輝」のいつれも一八八八年(明治二十一年)とせるは誤謬である。

(註十七) 八月二十四日・九月十九日附父宛、八月三十日、九月十二日、九月二十七日附母宛書簡。

(註十八) 十一月二十九日附父宛、明治廿三年一月九日附大熊氏廣宛書簡、及び久米稿

「亡友黒田清輝と佛蘭西に居た頃」(前出)

四

明治二十三年（一八九〇年）に入り、彼の製作態度は愈々本格的となり、サロン出品の爲めに眞摯なる研究と製作が始められた。

一月前後、彼は再び美術大學校に於て美術解剖學を聴講した。二月には陸軍士官學校教授たりし河北道介が巴里に遊學し來り、彼等の仲間に加つた。

而して、前年來サロン出品畫に就て構想を練りつつあつた黒田は、二月二十日頃より畫室にモデルを備ひ、製作に著手した。（註一）即ち、此の作品は今日東伏見宮家に收藏さるる「マンドリンを有する女」（油繪 高八〇・二種 幅六四・三種）であつて、マンドリンを奏し終つた女性が樂器を左手に抱き、頭を椅子蒲團にもたせて物思ひにふけれる様を表はし、半裸に描かれてゐる。而して、彼は此の製作に銳意力を注いだがサロン出品締切には間に合はず、且つコランが旅行中なりし爲め其の批評を求めることが出来なかつた。依て一先づサロン出品を翌年に延期し、四月初旬に至り略々此の作品の完成を見た。（註二）而して、コランは其の相應の出来ばえであることを賞したのであつた。（註三）事實此の作品は、彼が畫家を志して後最初の而も最も力を傾注したものであつて、記念的な作品である。

（Pl. X, 2 参照）

四月に入り、彼は午前中を學校に過し、午後は「マンドリンを有する女」に續いて「目覺め」とも題すべき、眠より覺めたる女性が白き下着のまま寝ながら目をこすりつつある女性の製作に著手した。これは前者より稍々大幅のものであつた。（註四）此の作品に就ては從來知らるるところ無く、今日又其の所在を明にし得ないが、これが完成せることは彼が此の年八月大熊氏廣宛に「マンドリンを有する女」と共に彼の巴里の

畫室に在る作品の一つとして擧げてゐる（註五）ことを以てしても知り得るところである。（註六）

五月に入り、氣候溫暖となるや、彼は巴里を離れ郊外に旅行して製作した。就中グレーに數次旅行したことは、此の年以來數年の間此の地に滞在し、多くの作品を完成する動機となつた。即ち、五月初旬彼は久米桂一郎と共に同地に旅行した。（註七）グレーの地は、彼が一八八八年（明治二十一年）五月學友の亞米利加人畫家の案内に依つて橋口文藏と遊んだところである。而して、此の旅行に於ては凡そ一週間の滞在の後歸巴したが、續いて、數日の後には再び久米及び河北道介と共に同地に遊んだ。（註八）グレーの地はフォンテンブプロオの南側にあたり、ロアン河に沿ふた當時戸數百軒餘りの小村落であつたが、古い教會堂があり、又古い石橋がかかり、河には水車や洗濯場や木蔭があり、一方には白楊樹の並木のある牧野、他の一方は高地になつた麥畑に矢車草と虞美人草が咲き亂れてゐた。（註九）而も四季夫々の風趣があり、此の自然の風物と、後に彼が適當なモデルを得たことに依つて、彼は長く此處に滞留して多くの製作を遺すこととなつた。更に注目すべきことは、此の地には當時佛蘭西畫家の來遊する者は尠かつたが、英・米及び瑞典等の畫家の滞留する者多く、是等は多く印象派の畫風を研究しつつあつたので、黒田・久米共に印象派に自然興味を持つに至つた（註十）ことである。而も、彼の作品が顯著に印象派風の觀照のもとに製作され來つたことは夫々の作品に就いて述べるところである。

而して、五月中グレーに於て著手せる作品には、窓のもとにて手仕事する婦人の圖及び綠蔭にて百姓等の休息しつつある圖等があり、更に構

想を廻らしつつあつたものには、黄昏の野より牛を曳いて歸る圖或は幼

兒に歩き方を習はす圖等があつた。(註十二) 而して、今日窓下に手仕事

する婦人の圖に該當すべき作品を二圖見出す。其の一は馬越恭一氏のも

とに收藏さるる油繪「針仕事」(高八〇・〇糶(幅六四・五糶))と美術研究所に藏する油繪

「編物」(高四八・七糶(幅五九・二糶))である。前者は、窓のもとに右横向に坐つた若き

婦人が針仕事をしてゐる圖であり、窓には白いカーテンが懸けられてゐ

る。人物は逆光のもとに描かれてゐるが、窓より漏れ来る光線の肩や膝

への反射が巧みに捉へられてゐる。其の

前の卓子の瓶には、野芥子や其他の野草

の花が挿されてゐる。(PL. IX, 2 参照)

又「編物」圖は、鎧戸のある窓のもとに

左横向に坐した青衣の若き婦人が編物に

耽つてゐる圖であり、その背後の卓上に

は、前者と同じく野芥子や其他の花を挿

した花瓶が置かれてゐる。(PL. VIII.

参照) 此の兩圖は、其の人物、室等

總て合致し、此のグレー初期の旅行中相

前後して描かれた作品と考へられるのである。次に、彼の構想を廻らし

つつあつたと考へられる緑蔭のもとに百姓等の休息せる圖等に就ては、

其の後の書簡にも消息を斷ち、その完成或は所在に就ても詳にし得ない

のは遺憾である。

五月末數日を巴里に過した彼は、開會中のサロンを觀、又コランの別

荘に招待された。其の際、コランは更に日本の菊と菖蒲の取寄せ方を彼

に依頼したのであつた。

斯くして、彼は六月一日には更にグレーに出發した。而して、此の滯

留の最初に著手したのは彼が「郷の花」と記してゐる村の少女を描いた

等身大の作品であつた。(註十二) この作品は、續いて製作に著手した著

名な「讀書圖」と平行的に尠くも八月中旬迄は製作を繼續して行つたも

のであつたが、その完成に就ても、所在に就ても明かにし得ない。彼の

書簡に描かれた小畫稿に依れば、一人の少女が斜右向に椅子に坐し、大

樹の幹に倚りかかり、膝の上に一輪の草を花持

つてゐる構圖であつた。(挿圖第六圖参照)

次に、彼が此の年最も精力を傾注したのは今

日伯爵樺山愛輔氏の藏する油繪「讀書圖」(高九

八・八糶(幅二糶七))である。此の作品に著手したのは六月

十日頃であるが、恰も雨季に入つたグレーは連

日雨天であり、彼は屋外の製作を阻まれて、室

内にて製作し得る畫因を求め、茲に「讀書圖」

の構想成つて著手したものであつた。(註十三)

此の作品に就ては畫稿類は今日見出し得ないが

その寫生帖第七號に同じモデルなるマリア・ビョオが正面を向き顔を稍

々伏せて讀書してゐる鉛筆素描があり、此の年六月九日の年紀が記され

てゐる。(挿圖第七圖参照) 斯くして「讀書圖」は著手されたが、其の最

初は凡そ一箇月を以て完成の豫定であり、毎週四日位午前三時間、午後

四時間半或は五時間づつ製作が續けられた。(註十五) 七月中旬にはホテ

ル・シユヰイヨンよりマリア・ビョオの姉妹の小住宅を借りて住み、八

月初旬僅かに旬日を巴里に過して古畫の摸寫を試みた(註十六)以外には、専ら此の製作に没頭した。而も、その衣服の傳彩にも腐心して屢々描き直し、遂に巴里に於て特に裂地を探し求めて仕立てさせる等の努力を拂つた。(註十六)而して、此の作品は凡そ八月中に纏められたものの如く、九月に入つては後に擧ぐる「婦人立像」の製作に著手してゐる。

「讀書圖」は、鎧戸のある室に斜左向に椅子に坐した若き婦人が左手に本を持ち、右手で頁を繰り乍ら讀書してゐる構圖である。淡紅の頬と金髪とは若き女性の健康を示し、朱紅の上衣と濃紺の裳は極めて明快な對比をなしてゐる。而も、その人體の描寫の確實さに加へ、その顔面と手の表情は此の作品の内容を極めて深きものとし、又鎧戸を通して射し込む光線の人物の頭首や衣服への微妙な反映は印象派風の描寫によつて爲され、畫面を明朗なものとしてゐる。(Pl. II 参照)此の作品は、更に加筆され、後に記す如く嚮に完成した「マンドリンを持てる女」と共に翌一八九一年(明治二十四年)のソシエテ・デザルティスト・フランセエズ Société des Artistes Français のサロンに出品し、此の作品のみが入選したのであつた。又此の作品はサロン出品後日本へ送られ、明治二十五年の明治美術會展覽會へ参考品として出陳されたことは後に記すところである。

却説、既に記したやうに、彼は初めホテル・シュヴィヨンに滞留して「讀書圖」の製作に従つたが、七月中旬にはモデルのマリア・ビヨオの姉妹の家を借りて移り住み、明治二十五年の暮此の地を離れて巴里に歸る迄の長い間、此處を生活の本據として多くの製作を遂げた。彼の語るところに據れば、其の家は六疊位の大きい二階建であり、彼は二階を

寢室及び居室にあて、下の土間の奥の板敷の室を畫室兼炊事室にあてた。而も、初めはホテルに於て食事したが、此の生活の途中からは、専ら製作費として其の學資を使用するため自ら炊事を試みたのであつた。彼は當時滞在中の英・米等の畫家に比して佛蘭西語に自由であつた爲め、間もなく村の人々とも懇意となり、殊にビヨオ家の人々又村の侯爵カゾオ家の人々とは親交を結んだ。(註十七)又月夜小川に舟を浮べて月を賞で、又久米・河北等去つて話相手なく退屈の時には小川に糸を垂れて釣魚を試みることもあつた。(註十八)

次に、グレー時代の製作に缺くことの出来なかつたモデル、マリア・ビヨオに就て記載することは彼の爾後の作品を考察する場合にも必要であらうと思はれる。マリアは當時十八九才の、丈の高い無邪氣なところのある少女であつた。色の白い健康な體格であつて、ブロンドの髪に血色の良い顔色をしてゐて、幾分獨逸人種の血の混じた東部フランス人の種類であつた。而して、ビヨオの家はグレーの平野の方に行く町外れで、可なり大きな石塀の内にある百姓屋に住んでゐた。年老いた母親だけで、兄が百姓の傍豚を屠つてフォンテンブロオの市の日には豚肉を賣りに老母と出かけてゐたといふ。黒田は此の家をも屢々訪ね、家族的にも懇意となり、嚮に述べし如くホテル滞留を中止して、その所有である小屋を借りて住んだのみならず、マリアは勿論その兄の小供達をもモデルにして數多くの作品を遺したのであつた。(註十九)

却説、八月中を「讀書圖」の製作に専念した彼は、九月に入るや、直ちに次の製作に移つた。即ち「婦人立像」であつて、等身大の女性を高さ六尺、幅四五尺の畫面に描いたもので、モデルは云ふ迄も無くマリア

であり、完成の上はモデル代と交換にマリヤに贈る約束のもとに著手した。(註二十) 其の構圖は夏衣の婦人が團扇を持つて庭に立つてゐる様であつたが、グレーの十月は既に寒く三四回描いて一時中止した。(註二十一)

此の間、九月中旬には巴里に一時歸つた。これは經濟的の都合に依るものであつたが、午前中はまた襦に描いた「マンドリンを持てる女」の修補に努め、午後は博物館に於て石像彫刻を油繪に寫す等のことを試みた。(註二十二)

十月に入り、再びグレーに赴いた。恰も久米は八月來白耳義方面を旅行中であつたが、此の月初旬、河北道介再びグレーに來遊し旬日を共に過した。此の頃、野原に於て女が牛を飼つてゐる構圖を練つて居たが(註二十三) 果して完成したか否か不詳である。

十一月中旬に至つては、既にグレーにも初雪を見、或は雪の夜景を、又朝景色等を試みた。(註二十四)

十二月初旬彼は、洋燈のもとにて針仕事する少女と机に伏して眠る少年とを描いた「洋燈と二兒童圖」の製作に著手した。これは翌年に至つて完成された。(Pl. X, I 参照) 而して、彼は此の月初旬中に、其の製作品を携へ巴里に歸つた。彼はその油繪四點をコランに示して批評を求めたが、コランはその進歩を賞し、就中「讀書圖」の出來ばへにはコランも推服し來るべきサロンに出品するよう慫慂した。(註二十五)

而して、此の月彼は巴里に在つて、學校に通學したが、之より前故國より來年中には歸朝しては如何との勸告を受けた。恰も製作に精進し、其進歩又躍進的な時に當つて、彼は更に數年の研鑽の必要を説き、少く

もサロンに於て二等賞を贏ち得、將來實力を以て歐人と並び立ち行く基礎を築いて後歸朝し度き希望を懇に依頼したのであつた。(註二十六)

(註一) 明治二十三年二月二十日・同二十六日附父宛書簡。

(註二) 三月十三日・同二十一日・同二十八日父宛書簡。三月十三日附書簡に

「(前略) 私かきかけ候書未ダ全く出來上り不申候。しかるに共進會出品の期ハ明後日限りと申事、左候得ば、とても當年の間ニハ會ひ不申候。且つ當分教師旅行中にて相談も不出來、又たとへ大いそぎにてかき上候とも、不充分なる者にては何の功能も無き道理、依而出品の事は來年と極め、此の畫は今一週間もかゝりて充分に仕上る考に御座候。其額の大きさは凡そ高さが二尺七八寸、幅二尺計ニ御座候。趣向ハ女が琵琶を弾き終りてなにか物を想たりと云様な風情をかきたる積に御座候(後略)」

と記し、素描を以て説明してゐる。而して、此の作品の製作年代に就て、久米桂一郎の「黒田清輝小傳」(美術研究所刊、黒田清輝作品收藏目錄所載) 其他、坂井屋水著「黒田清輝」に一九九一年の製作とさるるは誤。

(註三) 四月三日附母宛書簡。

(註四) 四月十一日・同十七日附父宛及び八月十四日附大熊氏廣宛書簡。而して、此の製作に就て、彼は當時抱ける裸體畫論ともいふべき見解を四月十七日附父宛書簡に次のやうに述べてゐる。

(前略) 今度のものは、前者に比すれば大きく趣向は(將に目をさまさんとする)と云積にて女がねながら目をこすり居る體をかき申候。當地にては、人の體を以て何にか一の考を示す事有之候。先づ私の教師の畫を見ても春と云様なる題にて、草花の咲き出て居る中に丸はだかの美人がねて居りながら何に心なく草葉を取りて口にくわへたる様をかき、又夏の圖として、數多の女が園中にて或は花を摘み或はそれを頭にかざしねたるもあれば立たるも有り、又池中に遊び居る者もありと云畫をかき候。此等の圖は、餘程氣分高尙にして且筆がよくき、候はでは出來難き者に御座候。畫學中最もむづかしき者は人物にて、人物も衣を被たるよりは、はだかの方一層むづかし候。學校などにても常に裸體を用ひ申候。畫かきが畫をかきは、學者が文章を作ると同じく、自分の考を人に見せる事なれば、己れの精神が高尙に非ざる以上は、兎ても立派な畫の出來る道理無御座候。一寸考へ候時は裸體の人物と云ては、甚だ不體裁な者の如く有之候得共、之れは全く俗人の考にて、其考こそ却而不體裁なる者に御座候。

凡そ天地間の生物中、人間程奇麗によく出來居る者は有之間敷候。而其人間中の最も完全なる者を見る時は、此の上もなき愉快を覺る事、花の最も美なる者を見るよりも一層

の事と奉存候。教師が美人を畫て春と題したるを、心得なき人は見て只草の上にはだかの女がねころび居るかなと思ひ熱帯地方の野蠻人はともかくも、歐洲などにて女が裸體にて、芝原に臥すると云事はなしなど、色々馬鹿な評を下す可候。併し、教師は春の心地を畫きたるにて、今咲き初めたる花と云様な美人の體を畫きたる也。即ち、此の春は人の精神中のみ存する春にして、教師と同じ感じを持ちたる人が此の圖を見る時は、云に云はれぬ愉快を覺る事に御座候（後略）

（註五）八月十四日附大熊氏廣宛書簡に

「前略」巴里へのこし置候圖は、一つは女がマンドリスと佛語にて申琵琶の類なる樂器をだき、頭をまくらに打ちつけてなんだか物を思つてる體の者に候。他の一は、女が白ちばん一まいにて寝ながら左の手にて目をこすり居様也（後略）」

（註六）四月十七日附父清綱宛書簡。

（註七）五月七日附母宛、八月十四日附大熊氏廣宛書簡、寫生帖第七號等。

（註八）五月十六日附父宛書簡。

（註九）黒田清輝談・小林鐘吉記「雜誌集二」（光風一ノ三）。久米桂一郎「黒田清輝小傳」（美術研究所刊、黒田清輝作品收藏目錄）、久米桂一郎「佛國修學時代の黒田君と其制作」（前出）

（註十）久米桂一郎「黒田清輝小傳」（前出）

（註十一）五月二十三日附父宛書簡。

（註十二）六月六日附父宛、同十九日母宛書簡。

（註十三）六月十三日附父宛、同十九日母宛書簡。

（註十四）右同。

（註十五）八月八日附父宛、同十三日附母宛書簡。

（註十六）久米桂一郎「黒田清輝小傳」（前出）、同「亡友黒田清輝と佛蘭西に居た頃」（前出）

（前出）

（註十七）「雜誌集二」（前出）。

（註十八）八月八日附父宛、同二十八日附母宛書簡。

（註十九）七月十二日附母宛書簡、久米桂一郎「亡友黒田清輝と佛蘭西に居た頃」（前出）。

（註二十）八月十三日附母宛、同十四日附大熊氏廣宛、九月四日附父宛書簡。

（註二十一）十月十六日、十一月二十八日附母宛書簡。

（註二十二）九月十二日附母宛、九月十九日附父宛書簡。

（註二十三）十月十六日附母宛書簡。

（註二十四）十一月二十八日附母宛書簡。

（註二十五）十二月十二日附父宛、十二月十八日附母宛書簡。

（註二十六）十二月十八日附母宛、同二十六日附父宛書簡。

(一) 黒田清輝筆 田舎家

美術研究所蔵

(二) 黒田清輝筆 グレーの水車場

東京 久米四三彦氏蔵

(一) 黒田清輝筆 自畫像

東京 黒田照子氏藏

(二) 同 自畫像

美術研究所藏

(一) 黒田清輝筆 畫室にての久米氏像

東京 久米四三彦氏藏

(二) 同 編物

美術研究所藏

(一) 黒田清輝筆
アトリエ

東京 黒田照子氏藏

(二) 同 針仕事

東京 馬越恭一氏藏

(一) 黒田清輝筆 洋燈と二小兒

東京 侯爵 前田利爲氏藏

(二) 同 マンドリンを持てる女

東伏見宮家御藏